

学校トイレの拒否

～その心理的原因に関する実証的研究～

平 尾 浩 子

Hiroko Hirao

要 約

最近、生徒が学校のトイレを利用しようとしなないという現象が、様々なメディアに取り上げられ、社会問題にまでなっている。一般的に、教育現場においては、この問題が、学年層と関わらず、普遍的なものであり、トイレを美化することによって解決できるという認識が持たれている。従って、本研究では、この問題の原因がトイレの物理的状態よりも、対人関係にあるという異なった仮説をたて、それを検証するために研究を行った。

ここでは本研究の結果を述べ、基本的な仮説の妥当性を検討した。さらに、結果に基づいていくつかの要点や、結論について考察している。

はじめに

近頃、テレビや、新聞で学校のトイレに関するニュースや新聞記事を見かけることが多くなった。生徒が学校のトイレを嫌い、あまり利用しないということが、社会問題にまでなっているというのである（毎日新聞、1998 8月19日）。生徒達の意見は、「学校のトイレは汚い、臭い、暗い。」「だから嫌いだ。」「利用したくない。」ということである（金岡、1999；松浦等、1999；國本、1996、；カゴメ調査レポート、1996）。そしてこのような意見を受け、全国で学校トイレの改装への取り組みが、異様とも言えるほどの高まりを見せている（読売新聞、1999年6月27日）。例えば、京都市では1998年度より5年がかりで、市内約300の全幼稚園、小中高、養護学校のトイレを対象に「快適トイレ整備事業」をスタートさせている。「学校のトイレには行きたくない」と我慢し、授業中に腹痛を訴える生徒が増えているなど学校現場の声を尊重し、トイレに洗浄器付き便座を設置したり、天窗を開けて明るくすることなどが、18億円の総事業費の中に盛り込まれている（読売新聞、1998 2月19日）。また、北九州市でも8億6

千万をかけ、1998年度より「ハートフルトイレ整備事業」として、市内の学校に洋式トイレを増やし室内を明るくするなど子ども達に親しまれる空間にする試みが始まっているのである（読売新聞、1998年2月14日）。

一方、テレビ等でも学校トイレの改修に関することはニュースや特集で頻繁に取り上げられ、滋賀県の栗東中学が、一校で6千万円をかけてトイレ改修をした話は、各局の番組で繰り返し報じられた。

このように一般的には、学校のトイレに関する諸問題を、トイレをきれいにすることによって解決してゆこうという動きが盛んであり、古いトイレを改装すれば、あるいは近年のライフスタイルの変化にあわせ便器を洋式にすれば、生徒達のトイレに関する問題がすべて解決するような認識がひろがりつつあるのである。しかし本当にそうであろうか。物理的な問題を整備すれば、生徒達がトイレを利用しないという問題は全くなくなるのであろうか。このような疑問に対して答えるために、以下に述べる予備調査を行った。

1. 予備調査の概要

1. 方法

本予備調査の目的は、1) 学校トイレの利用について、どのような問題があるのか、2) 学校トイレは実際に利用されているのかどうか、3) 利用されていない場合、どのような理由があるのか、4) 学校教育にどのような影響があるのか、等の疑問を解明するために教育関係の当事者及び学生に面接を行うことである。本研究において用いた方法は以下の通りである。（調査期間：1999年6月4日～7月30日）

教育者の面接：まず次のような教育関係者14名を対象として、「学校におけるトイレに関する諸問題」について、個別に面接あるいは電話にて尋ねた。対象者の内訳は中学校校長、教頭各1名、小中学校養護教諭6名、

小中学校教諭各1名、市教育研究所所長1名、元小学校教諭1名、元幼稚園教諭1名、塾経営者1名である。さまざまな問題が語られたが、問題の中心は学校のトイレがあまり利用されていないということであり、授業中「おなかが痛い」といって保健室に駆け込む子供が何人もいるということが、特に中学校の養護教諭を中心に大きな問題として語られた。

小学生の面接：次に小学生を対象に、「学校トイレの利用について」という簡単な質問紙によるアンケートを実施し、その後の時間を利用して「トイレについての問題」ということで意見を聞いた。小学生の内訳は、5年生が男子5名と女子3名の合計8名、6年生は男子3名と女子3名の合計6名であり、あわせて14名を対象とした。アンケートの結果では、「学校のトイレは汚いので嫌い」という回答が多く、ほとんどの生徒が学校のトイレをあまり利用していない事が分かった。また自由にトイレについて意見を述べてもらった中に、「トイレを利用する子はいつも決まっている」、「女子は排便するのが、(周りに)バレないからいい」、「学校のトイレが、ホテル並の豪華なトイレになっても、家のトイレがいい」というものがあった。

大学生の面接：また大学生にも、小学生や中学生だった頃の記憶に基づいて、学校のトイレに関して当時どのような問題があったのかについて話し合ってもらった。学生の内訳は、男子7名、女子4名の合計11名である。内容としては、「小学校の低学年の頃はおばけが出ると思い怖くて利用しにくかった」「落ち着かないと利用できない」という意見や、「年代があがるとあまり気にせず利用できるようになった」という意見などがあった。最も話題になったのは、中学生の頃の男子トイレにおける個室利用についてであった。これは、男子がトイレの個室に入ると、必ず嫌がらせがあるということである。

例えば、ドアをたたかれ、上からのぞかれたり、ホースで水をかけられたり、排便をしていたことを皆に言いふらされるなど陰湿ないじめを受けるというものである。そのため生徒達は学校で便意を催しても必死で我慢する為、授業中におなかが痛くなり保健室に駆け込むという悪循環に陥るのである。そして養護教諭に、「配慮のトイレ」（調子の悪い人や何らかの理由でトイレを利用しにくい人の為の特別のトイレで、学校により様々な呼び方がある）に行き、排便するよう促され排便を済ませると腹痛が治るという場合が増えているのである。そのため必然的に生徒は休み時間に生徒用トイレで排便をするという事態を避けるために次のような努力をしなければならなくなる。生徒はまず学校では絶対排便せずにすむように、朝できる限り、家で済ませてくる。不幸にも学校で便意を催した場合、必死に我慢して、走って家に帰り用を足す。やむを得ず学校で排便しなければならない時は、皆の行く時間や場所を避けて利用する。例えば始業のベルが鳴ると同時にトイレに入れば、皆は教室に入っているから、誰もいないトイレで落ち着いて用が足せる。又自分の学年の階や棟ではなく違う学年の階や棟のトイレを利用すれば、違う学年の人に干渉されることはないので安心である。以上が面接で語られたことである。

2. 予備調査の結果

本予備調査を行うことによって以下のことが分かった。要約すれば、生徒達は、学校のトイレをあまり利用していないということである。その理由は様々である。即ち、「トイレが汚いから」、また「落ち着かないから」、「トイレに行くこと自体が恥ずかしいから」などの理由であった。しかし、最も普遍的な理由は、個室を利用すれば、のぞかれたり、言いふらされるなどの陰湿ないじめ行動に遭うことである。

さらに生徒達にとり、面と向かってトイレの利用について質問されることは、非常に恥ずかしいことであるので、答えにくいのである。この場合、

黙ったり、笑ってごまかしたりすることは一般的な反応であり、積極的な答えを求めることは非常に困難である。即ち、面接法を用いて、生徒に直接的に尋ねることは適切な方法ではないことが分かったのである。

II. 本研究の方法と結果

予備調査から言えることは、生徒がトイレを利用しない理由は、トイレの物理的な条件によるものではなく、発達の要因による問題であろう。即ち、前述したようにトイレの状態に関わらず、中学生の心理的な特徴である。これに基づいて、トイレの利用に対して抵抗が大きいのは中学生、特に男子であろうという基本的な仮説をたてた。本仮説を検証するために、以下の方法を用いた。

1. 方法

対象：本研究を行う際に、小学生384名（男子195名、女子189名）中学生186名（男子94名、女子92名）、高校生131名（男子=59名、女子=72名）、大学生306名（男子=141名、女子=154名、不明=11名）の合計、1007名を対象にした。

調査の実施方法に関して、三つの方法を用いた。すなわち、直接に対象に配布して、その回答を求めた方法と、クラスの担任を通じ学生に調査を実施するように依頼した方法であり、後者には学校で回答を求めた場合と、家で回答後学校で回収した場合がある。（期間：1999年8月19日～2000年6月30日）

測定方法の作成：本研究のテーマである「生徒の学校トイレにおける態度」に関する研究がほとんど行われていないために、尺度などの測定方法がないのである。従って、研究を行うためにまず尺度を作成する必要があった。従って、前述した面接の結果を考慮に入れながら、以下のステップを



Figure 1. 本研究において用いられた投影尺度

踏んで、より適切な尺度の作成を試みた。

Figure 1 に示されているように、新たに作成したこの尺度とは、Thematic Apperception Test (TAT) 日本版試案 1 絵画統覚検査図版 臨床心理学) の図版 (児童 5) に手を加えて作成したものである (Murray, et al., 1938 ; 坪内, 1984 ; 戸川, 1985)。

絵について、簡単な質問を 3 問添え、それに沿って回答するようにしたものである。図版は TAT を参考にして、学校のトイレを連想させる場面を描いたもので、二人の生徒が、何かをしている状況を描いたものであり、対象が学校のトイレにおける態度を物語として描き出すよう期待するもの

である。

投影法：投影法のめざすところは、「被験者の固有なパーソナリティの特徴を、自覚的行動的表現の様式から内面に潜在する願望や感情や葛藤の様相にいたるまで、できる限り豊富に導き出すことである。そのためには、被験者が反応に際して慣習的な判断や表現に頼ったり、表面的・形式的な応答で済ませたりできないような課題を設定する工夫が必要である。」(心理臨床大辞典1992)

そのため、この尺度を作成するにあたり、図や質問内容についてはかなり工夫をした。例えば図に関しては、場所、人物の表情や服装などすべてにわたり特定されるのをさけるために、トイレのマークを半分しか見えないようにして、この場所がトイレであることを断定されないようにしたり、人物についても表情や服装をあいまいにして、できるだけ情報の量を少なくした。そうすることにより、対象がその人物について自由に思い描けるようにしたのである。また質問として「Q1：この二人は何をしているのでしょうか」「Q2：これから何が起こるのでしょうか」「Q3：最後はどうなるのでしょうか」の3問を添えた。以上が、学生の学校トイレにおける態度を測る尺度について、完成にいたるまでの経緯とその内容である(この尺度は以下、投影尺度とする)。

2. 結果

前述したように本研究の仮説は、学校トイレの利用に対して抵抗の大きいのは中学生、特に男子である。本仮説を検証するために、以下の分析を行った。

調査後の集計：投影尺度に関して、Q1からQ3までの項目における物語の内容を分類した。即ち、まず、全ての回答を書き出し、カテゴリー化

Figure 2. AとB登場人物の行動のカテゴリー化

登場人物A (左の人) の行動	登場人物B (右の人) の行動
<p>カテゴリー1： トイレをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トイレに入ろうとしている。 ・ 用を足そうとしている。 ・ トイレの個室に入ろうとしている。 ・ 授業時間中にトイレに来た。 <p>カテゴリー2： トイレ以外の行為</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 話をする。 ・ 会う。 ・ 見つめる。 ・ かくれんぼ ・ 手を洗う。 ・ 掃除 ・ 貧血でトイレで倒れる。 ・ けんかをする。 ・ ドアの向こうの何かを見ている。 ・ ベットの死 ・ どこかに行こうとしている。 ・ 女子便をのぞいている。 ・ 泣こうとしている。 ・ 部活中にけがをしたので教室に帰った。 ・ お化けがでるといふ噂を確かめに公園に行った。 	<p>カテゴリー1： Aへの否定的影響 (Negative effect)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aがトイレに入るのをのぞく。 ・ 授業中トイレに来てAを見た。 ・ Aの様子を見に来た。 ・ Aがトイレに入るのを見つけた。 ・ Aを追いかけてきた。 ・ いたずら、いじめている。 ・ たくらんでいる。 ・ Aをねらっている。 ・ Aを閉じこめる。 <p>カテゴリー2： Aへの中性的影響 (Neutral effect)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aの付き添い ・ 友達を捜している。 ・ 外でAを待っている。 ・ 後から来た。 ・ 順番待ち ・ 驚かそうとしている (遊びで)。 ・ さがしている (かくれんぼ)。 ・ トイレに入ろうとやってきた。 ・ 謝ろうとしている。 ・ たまたまトイレで会った。 ・ 待っている (個室が空くまで)。

した。Q1については、図中、向って左の人物（以下A）と、右の人物（以下B）、それぞれについて書かれていた内容を Figure 2 の通り分類した。

まずAの行動については「トイレをする」と、「それ以外」の2つ（以下、Aカテゴリー）にカテゴリー化した。第一カテゴリーの内容は、Figure 2 に示されているように、「トイレをする」行為に関するものである。第

2 カテゴリーの内容は、それ以外の記述である。

同じく、Bの行動に関する内容も、「Aへの否定的影響」(Negative effect)と「中性的な影響」(Neutral effect)という2つのカテゴリー(以下、Bカテゴリー)に分類した。それぞれの内容の概要はFigure 2の通りである。

以上の内容のカテゴリー化の後にBカテゴリーと学年(Grade)とのクロス集計分析を行い、小学校の低・中学年(Primary School 1)、高学年(Primary School 2)、中学校(Junior high School)、高校(High School)、大学(University)の5つの母集団を比較した。

Table 1. The results of School Grade by the Story Content

Story Content	School Grade				
	Primary School 1	Primary School 2	Junior high School	High School	University
Negative effect	28.0 ¹ (21)	44.3 (132)	51.1 (95)	43.8 (57)	29.1 ² (89)
Neutral effect	72.0 (54.0)	55.7 (166)	48.9 (91)	56.2 (73)	70.9 (217)

Note : 1. The Values are Percentage and Frequencies

2. The results of χ^2 were $\chi^2(8)=181.8; p<.0001$

Primary School 1= From The first year to fourth year of Primary School

Primary School 2= From The fifth year to sixth year of Primary School

その結果、Table 1に示されるようにこれらの母集団の間に有意な差がみられた($\chi^2[8] = 181.8$ $p < .0001$)。即ち、相手に否定的な影響を与えること(Negative effect)に関しては、最も高い割合を示したのは中学生(51.1%)であった。その次は、小学生の高学年(44.3%)、高校生(43.8%)、大学生(29.1%)、小学生の低・中学年(28.0%)の順であった。また、中性的な影響を与えること(Neutral effect)に関しては、最も高

Table 2. The result of Sex by the Story Content
in the case of Junior high school

Story Content	Sex	
	Male	Female
Negative effect	51.6 ¹ (49)	48.4 ² (46)
Neutral effect	49.5 (45)	50.5 (46)

Note : 1. The Values are Percentage and Frequencies
2. The results of χ^2 were not significant

い割合を示したのは小学生の低・中学年 (72.0%) であり、その次は大学生 (70.9%)、高校生 (56.2%)、小学生の高学年 (55.7%)、中学生 (48.9%) の順であった。

次は、男女の相違について分析を行った。学校トイレに対する態度に関しては、最も否定的な傾向を示している母集団は、男子中学生であるという本研究の仮説を検証するために、「中学生」という学年層における「性別」と「学年」とのクロス集計分析を行い、男子 (Male) と女子 (Female) を比較した。その結果、Table 2 に示されているように有意な差が見られなかったが、Negative effect に関しては、男子が (51.6%) 女子よりも (48.4%) 高い割合を示し、同様に Neutral effect に関しては女子が (50.5%) 男子よりも (49.5%) 高い割合を示した。

3. 考察・結論

前に述べたように、本研究の目的は、生徒が学校トイレを利用しないという事実について調査し、生徒の学校トイレに対する態度を明らかにすることである。そのため新たな尺度 (投影尺度) を作成し、調査結果をクロス集計分析した結果、以下のことが分かった。

① 学校トイレにおけるAとBの関係に関して、有意な学年差が見られた。即ち、他の4つ（小学生の中・低学年、高学年、高校生、大学生）の学年と比べて、中学生が最もAとBの関係を否定的に認知している。換言すれば、学校トイレにおける対人関係の中で「トイレをのぞく」、「いじめようとしている」、「ねらっている」などの否定的な影響（Negative effect）が最も多いと認知している学年層は中学生である。また、2番目に多かったのは、小学生の中・高学年であり、3番目は高校生、4番目は大学生、最後は小学生の低学年という順番であった。従って、本研究の第1仮説が検証されたといえる。

② 本研究における第2仮説は、AとBの関係における「否定的な影響」に関して、性別の影響があるということである。即ち、女子に比べ、男子の方が特にAとBの関係を否定的に認知しているということである。しかしながら、本研究の第2仮説は検証されず、男女の差を指摘している松浦等（1999）の研究結果と異なって、男女間に有意な差が見られなかった。しかし割合から見れば、若干の差が見られた。即ち、男子においては「否定的な影響」が「中性的な影響」より多かったが、女子では逆に「中性的な影響」の方が「否定的な影響」よりも多いという傾向が見られた。

上述したように、学校トイレの不利用の現象に対して、教育現場は多額の予算をかけ、トイレの美化や改装に取り組んでいる。即ち、学年層と関わらず、生徒が学校トイレを利用しないのは、トイレが汚い、古い等、物理的な問題に原因があるためであり、これを改善することにより、この問題がすべて解決されるような認識が持たれているのである。しかし、本研究の結果から分かるようにそれは必ずしも事実とは言えないのである。即ち、結果が示唆しているように、トイレの不利用の根本にあるのは、トイレの物理的状態（古い、汚い、狭い等）よりも、トイレという社会的空間における、対人関係の問題（いじめ、攻撃）である。さらに、このような対人関係の問題は、教育現場における普遍的な現象ではなく、発達のな現

象、即ち、中学生という年層の特徴ではないかと本研究の結果が示唆している。従って、学校のトイレを利用しないという問題を解決するためにはトイレの美化以外のいじめに対する対策が不可欠であると考えられる。

(付記)

本論文作成にあたり、ご指導いただきました奈良大学社会学部助教授 Mohamed Hafsi 先生に、こころより御礼申し上げます。

参考文献

- カゴメ調査レポート (1996). 「子どものライフスタイルと排便実態に関する調査報告書」. In 「学校のトイレ研究会：望ましい小学校のトイレ環境～既存トイレのリニューアル、P. 5.」
- 金岡トモコ (1999). 「学校のトイレに関する中学生の意識」学校のトイレ研究会金沢大会研究発表.
- 國本正雄、他 (1996). 「小学生の便通とトイレに関する意識調査」 日本医事新報 3781:49-51
- 心理臨床大辞典 (1992). (株) 培風館.
- 坪内順子 (1984). 「T A T アナリシス」 垣内出版.
- 戸川行男 (1985). T A T 日本版試案 1 絵画統覚検査図版 臨床心理学研究会.
- 毎日新聞 (1998). 「学校トイレ避ける理由ボクたちが代弁します」. 朝刊、8月19日.
- 松浦和代、國本正雄 (1999). 「中学生の便通と学校トイレに関する意識調査」 小児保健研究、第58巻 第5号
- Murray. A., al. (1938). *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
- 読売新聞 (1998). 暗ーいトイレ「いや」学校も洋式に. 朝刊、2月19日.
- 読売新聞 (1998). 「学校のトイレいや！」に対応. 朝刊、2月14日.